

## サーカスと朗読会——ザルツブルク便り

山本浩司

近頃、身の回りから姿を消したもののたちのことが気になって仕方がない。越し方を振りかえると、そうしたものの数の多さにあきれるばかりだ。人生も半ばをすぎた中年男の醜悪な感傷といわれればそうにちがいない。でも、彼らの消え去り方にはどうしても戦慄を覚えてしまう。ついさっきまでしごく当たり前の顔をして身近にあったものが、いつのまにかいなくなっているのだ。泣き叫ぶでもなく足掻くでもなく、ただひっそりと退場していく。残された者がやっとそれに気がつくのは、もう取り返しがつかなくなってからでしかない。いや、彼らだって必死になって歴史の舞台に残ろうとしたんじゃないのか。むしろ、こちらの注意が足りなかったのであって、もう少し気を配ってればこんなことにはならなかったはずでは。そうかもしれない。けれども、宿命論者のそしりを免れないのを承知でいえば、アクセルを全開にした歴史の勢いはもはや個人の努力では止めようがない。チェーホフの『桜の園』の第二幕で唐突に響く得体の知れない軋み音のように、高速回転する巨大な歴史のチェーンソーに時代遅れの遺物はなすすべもなくなぎ倒されていく。こうして伐採されて禿げ山となった楽園の無惨な姿を前に呆然とする間こそあれ、自分もふっとばされないようにびくびくしながらできることといえば、せいぜいが落ち葉をひろうことぐらいのような気がする。

今回の在外研究の、表向きの目的はさておくとして、ひそかな目論見にサーカスを見るというのがあった。この大衆芸術が20世紀初頭にまばゆいばかりの輝きを放っていたことは、キルヒナーでもスーラでもピカソでもその頃の絵画を見れば一目瞭然だ。とりわけ映画はこのイリュージョン芸術との親和性が強いらしく、初期のチャップリンから、映画監督でなければサーカスの団長になりたかったというフェリーニまで、サーカスの舞台裏を描いて飽きることがない。文学でもヴェーデキントの『地霊』の序幕やカフカの『断食芸人』が好例だろうし、最近だって、サーカス団の少女との初恋の思い出を取り上げたマルティン・ヴァルザーの『噴き出す泉』が印象に残る。もっとも最後の例は、むしろサーカスがもう追憶としてしか語れない証拠かもしれない。とにかく「本場」のサーカスをいちど味わわないことには何もいえない、と思ったのだ。

念願がかなう機会は意外に早くきた。サーカス団の巡業がザルツブルクにやってくるという。街のあちこちにげげしい色のポスターが貼られ、縁日ムードがいやがおうにも高まる。腰の重い妻子をせき立てるようにして、市バスの終点、場末の見本市会場にまでかけてみる。殺風景に立ち並ぶ倉庫の影から紅色のテントの先端がのぞいたかと思うと、鮮やかな彩りのキャンピングカーの一群がたちまち視界に飛び込んでくる。しかし、あら

かじめ明かしておけば、この日心が沸き立ったのはこの刹那だけだった。足を踏み入れたテントのなかの席はがらがら、アトラクションには空中ブランコもなければ、火の輪をくぐる猛獣ショーもない。安っぽいダンスと気の抜けた手品、古くさい道化芝居とくれば、娯楽が多様化した時代の競争に勝てるわけもない。場違いなローラースケートショーはそれでも時代に媚びようとする、涙ぐましいけれど、見当違いの努力と見える。咆哮する猛獣の代わりに、家畜が、馬と牛、それにラクダが、こちらの偏見か、しごく鈍重に走り回るばかり。もちろんそれだって調教するのに莫大な時間と労力がかかっていることだろうに、費用対効果はそれにとつてい見合うものではない。動物愛護運動のせいで、という団長の最後の言い訳は嘘かまことかわからないが、サーカスに起源からつきまとう暴力と血の臭いも、怪しげな見世物小屋の雰囲気もみじんもない。恐ろしげに唸るはずの団長の鞭は、テレビの効果音に慣れた耳には、拍子抜けするほど間抜けな音をたてる。団長の人相も凶悪な人攫いというよりも、人のよい小売店の主人といったところ。時代に取り残されたのが分かるのは、とにかく人手が多いこと。家畜だって丸抱えなのだから、飼育係の人件費はいわずもがな、餌代だってばかになるまい。生演奏の楽団を維持しているのはサーカス団の精いっぱいの矜持だろうが、むやみに目につく客席案内係もポップコーンの売り子もきつと専従なんだろう。アウトソーシングや合理化などどこ吹く風の贅沢さだ。古きよき時代の大家族主義の名残だろうが、身体から家計から贅肉を落とすことに精を出すこの時代にはとても持ちそうにない。これには嘘のような本当の後日談がおまけにつく。新聞によれば、このサーカス団が莫大な負債を抱え倒産、新しいスポンサーを探すという。団長は人減らしをして再生したいと語ったとか。その報道を目にした同じ頃、日本でも評判のキダム・サーカスをたまたまテレビで見たが、これはこれでサーカスの夢を打ち砕くに十分なものだった。まさにテレビ時代に即応したショーであって、まるで退屈は敵とばかりに、オリンピック級の技が次から次へと繰り出され、息をつぐ暇も与えてくれない。生き残りのためのひとつのモデルを示しているといえようが、図らずものどかな古典的サーカスの死を証している。

ここまで無惨だとは思ってもよらなかったものの、いまサーカスを見るということはただちにその死をこの目で確認することでしかないとは予想がついていた。というのも、すでに80年代にヴィム・ヴェンダースが作家ペーター・ハントケの協力をえてサーカスへのオマージュ映画『ベルリン・天使の詩』を撮っており、出国前にそれを見直す機会があったのだから。ブルーノ・ガンツ扮する天使が天上界を去るきっかけとなるのは、サーカスのブランコ乗りの少女に恋したことだった。天使のパースペクティブで撮られていたモノクロームの映像が、テントの高みを飛び交う少女を捉えた瞬間に天然色に変わるのが有名だが、そのサーカス団もいかにも時代遅れのうらぶれた姿をさらしていた。テントが畳まれるのも必定、その後にはぽっかりと広がる空き地にたたずむ天使の姿は誰が何と言おうと心に残る。そもそもヴェンダースには、古典的な映画館の死を看取った映画『さすらい』があるし、ハントケはハントケでジュークボックスの痕跡を捜し求めて世界の果てまで駆け巡っており（『ジュークボックスについての試み』）、二人とも時代に取り残されていく事物

への強い関心を持っていることがわかる。そして二人の協力関係の集大成ともいえるベルリン映画は、サーカスの死と同時に、物語の死を語るものでもあった。天使たちが住みつく国立図書館を徘徊する老人ホメロスが、ムーサの神々に向かって、聴衆の不在、ひいては物語の不可能性を嘆き、しかしそれでも「平和の叙事詩」への期待を語る場面がある。その直前にはご丁寧に直接引用までされるのだが、それがなくとも、天使と良い物語と良い、この映画にはヴァルター・ベンヤミンの香りが立ちこめているのはいうまでもない。そのベンヤミンは、ロシアの小説家を論じたエッセイ「語り部」で近代における小説の勃興と物語の死を論じた。近代日本の黙読文化にすっかり慣れ親しんだ者からすると、聴衆という共同体を失って、孤独に生産され孤独に受容される小説という図式はしごく納得させられるものがあった。

しかしザルツブルクに来て痛感させられたのは、ベンヤミンのいう物語とはいささか質が異なるにせよ、ヨーロッパの朗読文化はなお死に絶えていないということだ。ザルツブルクに限らず、ミュンヘンでもウィーンでもベルリンでも書店の大きな一角を朗読CDコーナーが占めているし、文学館や劇場ではさかんに朗読会が行われている。俳優による朗読だってばかにできない。例えばベルリーナー・アンサンブルの稽古場で行なわれた劇場監督クラウス・パイマンの盟友ヘルマン・パイルによるベルンハルト『ヴィトゲンシュタインの甥』の朗読は、原作の配列を微妙に変えながら、それでもたぶん割愛という暴力は振るわずに、原稿を淡々と読み上げたものだったが、ミュンヘンのレジデンツ劇場（『演劇人』）、ウィーンのブルク劇場（『習慣の力』）、ヨーゼフシュタット劇場（『痴愚と狂人』）、フォルクス劇場（『退官を前にして』）といくつか見るこの機会があったベルンハルト劇の演出が罵倒のユーモアやナチズム批判の政治性を前面に出すなか、奇をてらった演出は何もないのに、というよりもないがゆえに、芸術通の狂人とその狂気につきあう「わたし」の悲しみがじわっと胸にしみ込んでくるのだった。やはりベルリーナー・アンサンブルでは、ベルンハルトお気に入りのウィーンの俳優たちに捧げられた『リッター、デーネ、フォス』（パイマン演出）が、初演と同じ舞台装置で再演されたけれど、こちらも、パイル演出による小説『古の名匠たち』の舞台化（ライヘナウ演劇祭のベルリーナー・アンサンブル客演）と並んで、オーソドックスな演出ゆえに、テキストのもっている力を十全に発揮させた、といえそうだ。どうやらベルンハルトのテキストは、演出家の独裁に抗する力を持っているとしか思えない。

ザルツブルクで朗読文化の厚みを確信させられたきっかけは、4月はじめに「ラウリス文学週間」というかなり個性的なイベントを訪れたおかげだ。ラウリスというのは、ザルツブルクから南に下って2時間ほど、最寄りの駅から日に数本のバスでさらに30分近くかかる、アルプス山間の村の名前。夏場のハイキング、冬場のスキーと観光を農業と並んで主たる生業とする地で、名産はシュナップス。教会を中心にして縦に伸びるメインストリートは、500メートルもつづかない。どうしてこんな僻地でと思われるのだが、そもそものきっかけは民衆に文化をという社会民主主義的啓蒙活動によるという。1971年にザルツブルクのジャーナリスト、エルヴィン・ギンメルベルガーの肝いりで始められ、35回目を

迎えた今年刊行された記念冊子を見ると、71年と72年には、ヨーンゾン、アイヒ、アイヒンガー、ベルンハルト、ハントケラ豪勢なメンバーが招かれている。同じ頃バッハマンも朗読したようだ。これまでに総勢約300人もの作家たちが朗読した勘定になる。マンネリ化した停滞期はあったというが、今ではザルツブルクの春先のイベントとしてすっかり定着した。

今年は「言葉と場所 (Worte und Orte)」という韻を踏んだテーマのもとに、文芸誌『文学と批評』の主幹カール＝マルクス・ガウス、セルビア系の老大家ミロ・ドール、ユダヤ系のペーター・シュテファン・ユンク、スイスのウルス・ヴィドマー、ルーマニア＝ドイツ人作家ヘルタ・ミュラー、言葉の魔術師フランツォーベルらが一堂に会した。本当は全部で一週間ぐらいつづくのだが、そのうちの最後の二日間だけのぞくことができた。プログラムによれば、いわゆる朗読会のほかにも、作家を自宅に招いていわば裸の付き合いをする「Störlesung」という試みのほかに、地元の中高生たちと作家が交わるワークショップなどもある。それに普通の朗読会といっても、なかなかほかでは経験できないような独特の雰囲気があった。会場となる村のホテルやガストホーフのキャパシティが小さいせいか、立ち見もでていて、まるでこれから拳闘でも始まるんじゃないかというぐらいの熱気がむんむんとたちこめている。文学がこんなにわくわくと期待をもって待ち受けられているというのは珍しい情景だ。フランツォーベルやヴィドマーの朗読では寄席のように笑いが巻き起こる。客層は、いわゆる専門家筋とは違って近在の人々が普段着で集まっている感じで、これもまた好感もてる。とうぜんビールもできれば、食事でもるので、かならずしもお行儀がいいとはいえないが、文学がアカデミズムの袴を着たしゃちこぼりとは違った伝統の上に立っているということを再認識させられた。この会を報じた新聞でも「活き活きとした」とか「くつろいだ」といった形容詞が踊るところをみると、このイベントが独特の位置を占めていることはまちがいないだろう。

最終日午前中にはいまや定番となった人気プログラム「子供の頃を語る」で、50年代はじめの生まれでほぼ同年代のガウス、ユンク、ミュラーらが登壇して、それぞれ思い出を語りあった。ガウスは難民としてオーストリアに流れ着いたボイオチア出身の「民族ドイツ人」を両親にもつし、ユンクは亡命ユダヤ人の子としてロサンジェルスに生まれた後、あちこち渡り歩いてウィーン、ザルツブルクで少年時代を過ごした。この二人は、そのうえ、ザルツブルクのギムナジウムで同級だったという。ガウスが、60年代後半から70年代はじめにかけての青春時代はカトリック主義がちがちのオーストリアにも自由の風が吹き込んできて、出自にかかわりなく、社会に溶け込んでいけた、と話したのが印象に残った。またそれぞれの祖父母のことに話を振られたとき、ユンクがショアーで失ったと語る、その抑えた語り方に心を動かされもした。一方、ヘルタ・ミュラーが、西側のそれとは好対照に、ルーマニアにおける68年の特異性を説明して、チェコ侵攻を拒絶したチャウシェスクが東欧における民主化の推進者のようにふるまったが、この民主化はすべて国民の本音を引き出すための罫に過ぎなかった、と述べ、また幼年期を美化するいっさいのセンチメンタリズムをはねつけたときには、その言葉の重みがそれまで和気あいあいとしていた会

場を一瞬静まりかえらせた。他のパネリストが衆人環視の僻村で過ごした幼年期を「牢獄」と評したのに対して、「牢獄は牢獄だ。私の友人は牢獄で命を落とした」と少し興奮ぎみに話に割り込んだ。彼女の言葉に対するセンシビリティも忘れられない。

「ラウリス文学週間」の意義はさらにそこで授与される賞にある。ラウリス文学賞は、処女作を対象とする新人賞としては、ドイツのアスペクト文学賞と双璧をなす。受賞者の顔ぶれをみれば、70年代にペーター・ローザイ、カーリン・シュトルック。80年代以降には、ヘルタ・ミュラー、ヴェルナー・フリッチュ、ノルベルト・グストライン、トーマス・ヘッチェ、ユディット・クッカルト、ルート・クリューガー、ペーター・シュタム、ユリ・ツェーら今や第一線で活躍する作家たちの名前が並んでいる。今年はクリスティーネ・ピツケの『朝を記述しようとする試み (Versuche, den Morgen zu beschreiben)』(ユンク・ウント・ユンク社刊)に賞が与えられた。コソヴォ紛争と思しき戦争から帰還した男の精神的トラウマと向き合う女性医療従事者の視点から語られる物語は、断章を積み重ねる手法でかなり独特な作品世界を作り上げている。最近の小説の軽いトレンドにテーマの上で真っ向から歯向うばかりではなく、読むのに難渋するぐらいに密度の濃い文体も特筆に値する。ちなみに、この本の出版者のユンクには、今秋のザルツブルク読書週間の賞を異例にも出版人として与えられた。授賞式では、ドイツからチャンスを求めてザルツブルクに移った経緯を語りながら、今年のアルノー・ガイガーのドイツ書籍賞受賞作を槍玉に挙げつつ、最近のドイツ小説の軽佻な傾向を批判し、戦後オーストリア文学のアヴァンギャルドな伝統への回帰を訴える硬派な謝辞を述べた。この硬派なところは90年以降「ラウリス文学週間」を主宰するブリータ・シュタインヴェントナーにも共通する。彼女自身小説も書いていて、新作『琥珀のなかで』(ハイモン社刊)は、リンツの広告代理業で成功を収めた女性ジャーナリストが、現代のイラク戦争を背景に、マーク・トゥエインをはじめとするアメリカの反戦の伝統を掘り起こす一方で、ロシア戦線で戦死した確信犯的ナチ党員の父親という逃れがたい過去と対決し、その足跡を求めて旅立ったウクライナではロシア＝ドイツ共同戦死者墓地プロジェクトの破綻に民族和解の困難を痛感する。「信憑性」があるかどうか大きな基準を置く硬質な批判的戦後文学の流れに連なる作品に仕上がっている。実際、引用された党員の手紙は作者の父の父親のものをほとんどそのまま使ったという。物語はウクライナ旅行をへて死んだ父親との一種の和解にいたるが、琥珀に閉じ込められた昆虫が脱出するかに見えたその瞬間に主人公は銃弾に倒れる。やや出来過ぎの結末なので、作者がここに良識派の主人公に対する皮肉な距離感を示そうとしたのではないかと思って、直接作者に尋ねてみたのだが、むしろ反対の声を圧する多国籍な産軍共同体の見えざる壁の厚さを示すことに力点があるとのことだった。作家の出身地リンツは近くにマウトハウゼン収容所があったし、ヒトラーによって総統都市に改造される場所だったこともあり、戦後60年を経てもなお、過去はいつまでも若いままであるようだ。そしてこの良識左翼的使命感でもなければ、「ラウリス文学週間」のコーディネーターを長く続けることなどとうていできないだろうと思われた。

もっとも、昨今のヨーロッパで朗読の伝統が生きているんだと手放してたたえるには躊

踏するところもある。ザルツブルク文学館でいえば、もともとホールが大きくはないのだけれど、いつも盛況とはいえない。マルギット・シュライナーら三人の作家が共演したときには、40人以上集めて椅子が足りないくらいだったけれど、無名の新人のときには聴衆の数は20人がいいところで、去年のバッハマン賞受賞者のテルカンプの時には、その新作『氷鳥(かわせみ)』が書評でかなり話題になっていたのに、荒天のせいかわずかに二人だった。聞き手の年齢層もわりと高めであって、十数年後にどうなっているかは予想もつかない。いわゆる教養読者層というのは、老いた青年を取り込み新陳代謝を繰り返してつねに維持されていくものなのか、それともいつか寿命の尽きるときがくるのか、予断を許さない。加えて、朗読会が商業システムの一翼を担っていることも忘れるわけにはいかない。日本の演歌歌手が場末のバーを回ってはCDを売り上げるにも似て、どさ回りをしては販売促進をしている側面がある。その点について、誇張の芸術家ベルンハルトが傑作『古の巨匠たち』の数頁をその戯画に捧げている。曰く、「いわゆる作家の朗読会、あれほどろくでもないものはありませんよ、とレーガーは言った。あれほど虫酸の走るものはちょっとないんじゃないですか。なのにあの連中ときたら、だれひとりとして、あの糞みたいな代物を朗読するのに何の痛痒もおぼえやしないんだ。連中が文学的遠征をおこなって儲けようとするものなんて、だいたい誰も面白いとは思いはしないんだ。なのに、連中は平気で朗読するんだ。壇に登って朗読し、どんな頭の弱い市会議員だろうと、愚鈍な村長だろうと、ぼかんと口をあけた国文の教師連中だろうと、関係なくぺこぺこするんだ、とレーガー。」80歳を超えて二日に一度はウィーン美術史博物館のティントレットのたった一枚の絵を見にくる音楽批評家レーガーの罵言は、作家が若ければまだしも、老醜をさらす作家の朗読は罪悪だと、さらにつづくが、紙数の都合もあるので、このぐらいにしておこう。

最後に、作家の顔を拝まなければ、あるいはその小説が描く世界に身を置かなければ、どうしようもないのだとすれば、極東の地でドイツ文学を読むことの意味が全否定されてしまう。だいたい作品にお墨付きを与える最終的権威としての作者はとうに抹殺されたのではなかったか。そのうえ、そもそも現代小説はつねに「何のために、誰のために書くのか」という問いと直面せざるをえなかったはずだ。ボードレール以来、アヴェンギャルド運動は読者聴衆と友誼を結ぶというよりも、むしろ罵倒し挑発し無理解を収獲するという茨の道を選んだはずなのだから。そういうふうにと考えると、確たる当てもなく海に投げ込まれる空瓶通信の比喩がやはり現代文学には似つかわしいのだ、と、所期の目的も忘れて、感じたりもするのだった。